

戦前期における千葉師範学校（現千葉大学教育学部）の留学生たち  
(付. 戦前期における千葉県域の軍事系学校の留学生たち)

見城 梢治

International Students at Chiba Normal School (currently Faculty of Education, Chiba University) in the Prewar Period

(Appendix: International Students in Military Schools in Chiba Prefecture before the War)

Teiji Kenjo

要旨

千葉師範学校が受入れた最初の留学生は「満洲国」の若者2名であり、1937年4月のことであった。「満洲国建国」から5年余り経った段階で、彼らは、日本との関連を強める教育の担い手として期待されたのである。その後、1943年までに、千葉師範学校は十数名の「満洲国」留学生を受入れていくが、本稿では、「満洲国」の留学生派遣政策や他府県の師範学校の受入れの動向と比較することで、その特色を明らかにする。

なお、千葉県内には軍事系の学校が複数存在しており、そこにも「満洲国」および中華民国からの留学生が在籍していた。戦前期の千葉県で生活し、学んでいた留学生を総体として、考るために、そのデータも付載した。

Abstract

The first two international students from Manchukuo were admitted to Chiba Normal School in April 1937, five years after the founding of the Manchurian state. They were expected to promote education that would strengthen the state's links with the Imperial Japan. A further dozen or so of international students from Manchukuo were admitted to the School by the year 1943. The Manchukuo policy on international study and the specific character of the school becomes clear when compared with normal schools in other areas of Japan. It should be noted that in Chiba Prefecture there were a number of military schools which also accepted international students from Manchukuo and China at that time. Relevant data can be found in the Appendix.



## はじめに

筆者は、この間、現在の国立大学法人千葉大学のルーツとなる旧制の高等教育機関が受入れてきた留学生の概況を整理することによって、千葉大学の留学生受入れ史、延いては近代日本の留学生受入れ史を顧みることを目的とする作業を継続している。そして、これまでに医学部・薬学部の前身にあたる千葉医学専門学校・千葉医科大学<sup>(1)</sup>、園芸学部の前身にあたる千葉高等園芸学校<sup>(2)</sup>、工学部の前身にあたる東京高等工芸学校<sup>(3)</sup>における、それぞれの留学生受入れ史をまとめてきた。

ところで、千葉大学において最も長い歴史を有するのは、教育学部であり、それは1872年を起源とする（後述）。筆者が、上記の諸学校の留学生史をまとめる際の基本資料としたのは、まず各学部の同窓会名簿であった。さらに日華学会<sup>(4)</sup>が編集発行していた『留日中華学生名簿』も重要なデータとなった。したがって、千葉師範学校時代の留学生を調べるためにあたっても、まず『会員名簿（千葉大学教育学部同窓会）』<sup>(5)</sup>を参照にしたのだが、戦前戦中期の在校生中に外国人留学生と思われる名前は看取できなかった。一方、『留日中華学生名簿』にも千葉師範学校所属の学生は掲載されていなかった。そのため、当初は、同校に在籍していた留学生はいなかったものと考えていた。

しかるに、「駐日満洲国大使館」が発刊していた『満洲国留日学生録』（1935～43年）<sup>(6)</sup>をチェックする機会を得たところ、そこに千葉師範学校に在籍していた11名の名前が存在することを確認できたのである。

そこで、本稿では、千葉師範学校時代における「満洲国」（以下では、原則的に「」を省略する。また「満洲」ではなく「満州」の文字を用いる）留学生の具体的データを紹介するとともに、満州国の留学生派遣政策と日本の師範学校による留学生受入れ実態を併せ検討することにより、戦前戦中期の千葉師範学校における留学生受入れの特色を考えていこうとするものである。なお、この視角に焦点を定めた先行研究は『千葉大学教育学部百年史』<sup>(7)</sup>を含め、存在しない。しかし、満州国による留日学生派遣については、劉振生氏の一連の研究がある。また満州国（および中華民国）からの女子留学生派遣については、周一川氏の研究がある。さらに、浜口裕子氏の最新作は満州国留学生の戦中と戦後を繋ぐ極めて重要な研究である。それ以外に個別の学問分野（たとえば商業や農業）を専攻した留学生の研究も少なくない<sup>(8)</sup>が、すべて、拙論の展開に関わる範囲で、適宜参照、紹介させていただくに留めさせていただくことをお断りしておく。

本稿によって、戦前期<sup>(9)</sup>の千葉県域の高等教育機関で学んでいた外国人留学生のデータ整理は、一応の完成を見たと考えている。しかしながら、戦前期の千葉県内に複数存在していた軍事系学校にも、中国（中華民国および「満洲国」）留学生が在籍していた。そこで、そのデータも、「付録」として併せて提供し、戦前期の千葉県域で学んでいた留学生の全体像を知るための補遺としたい。

## 1. 千葉師範学校時代の留学生たち

### ① 千葉師範学校の歴史と特色

千葉大学教育学部の起源は、1872年9月に現在の流山市に設立された「印旛官員共立学舎」とされている。したがって、2015年9月をもって、143年の歴史を刻んだことになる。この共立学舎が直後に鴻台学校と名前を変え、さらに千葉学校（1873年7月）、県立千葉師範学校（1874年5月）、千葉県尋常師範学校（1886年10月）、千葉県師範学校（1898年4月）と変遷した後、1943年4月に官立に移管され、千葉師範学校となった。この千葉師範学校には男子部と女子部が設けられたが、女子部の起源は、1877年9月に設立された千葉女子師範学校に遡る。それが、1884年6月に千葉師範学校女学部となり、以降、千葉県尋常師範学校女子部（1886年）、千葉県師範学校女子部（1898年）、千葉県女子師範学校（1904年4月）、そして、1943年に千葉師範学校女子部となる歴史を歩む。

この千葉師範学校（1942年度以前は、「千葉県師範学校」が正式名称であるが、本稿では、官立時代のこの呼称で便宜上統一する）が、留学生を受入れたのは、1937年の春からである。『百年史 千葉大学教育学部』（1981年）は、「政治史上は昭和六年以降を戦時下と呼ぶべきであろうが、本稿では北支事変が始まった昭和十二年七月以降、太平洋戦争終結の昭和二十年八月までを「戦時下教育」として記述する」<sup>(10)</sup>と書くが、その「戦時下」に突入する直前であった。

この厳しい時代における千葉師範学校の動向について、『百年史』に従って、もう少し叙述を進めていこう（同書からの引用は、当該ページを本文中に書き込む形で処理していく）。

日中戦争が勃発する年、1937年の3月27日付で、修身、公民、教育、国語漢文、歴史及地理の「師範学校教授要目」が改訂された。その方針は「國体ノ本義ヲ明徹」にする、という観点に基づくものであった。そこでは日本独特の「国体」が強調され、同年3月30日に文部省が発行した小冊子『國体の本義』の内容を先取りするものであった。そして「千葉県の両師範学校、同各附属小学校では、『國体の本義』を使って、教員は学習会を開くとともに、上級生や研究科生の準教科書、あるいは教科書として使用し、これを教職員ならびに生徒に普及することに努めた（p 255）」とされる。

同年7月7日に盧溝橋事件がおこって間もない8月24日には、「国民精神総動員実施要項」が閣議で決定され、国民に対する政治的思想的動員が図られていく。全国の師範学校においても、こうした国家意思が強く貫徹せしめられていくのだが、千葉師範学校においては、「政府が具体的行動を提起しているにもかかわらず、行動化という点では積極的ではない。派手に行動したり、軍隊風の行動をただちに採用するという点では、ある種の警戒心が働いていたように思われ（p 256）」たと『百年史』は書く。具体的には、①校舎や教室内に神棚を設け、全校的行事として、定期的に挙げることはなかった。②国民精神総動員運動は教師や上級生に対する軍隊式の挙手礼を励行していたが、「千葉県師範学校では昭和十七年頃まで頑固に脱帽の礼を守った（p 257）」。③寮の点呼の際、軍人勅諭や戦陣訓

の斉唱をすることが昭和十七年ころから全国各地で行われるようになっていたが、千葉師範では遂に行われなかった。④授業時間および食料の確保のため、工場動員を避け、農場手伝いや千葉連隊司令部作業補助を行った、云々。すなわち、千葉師範学校では、他校に比して過度の精神主義鼓舞はなされなかつたと『百年史』は捉えているのである。

しかし、こうした中、1943年3月に「師範教育令」が改正され、また新たな教育内容を規定した「師範学校規程」も出された。同年4月からの施行にともない、全国の師範学校は、官立に転じ、また修業期間は、本科3年、予科2年と定められることになる。

この1943年は、日本軍の戦局がきわめて厳しい状況に置かれていく時期であった。千葉師範学校においても「戦時下の学校運営は、勤労動員の日常化によって、昭和十八年秋以降は、授業が困難になるとともに、学校は労務の提供と管理のための機関のような状況に追いやられた（p 271）」と回顧されるような状態に向うのであった。

## ② 千葉師範学校における留学生たち

こうした本格的な戦時体制下に入ろうとしていく1937年春、千葉師範学校に2名の満州国出身者が入学する。そして、それまで外国人留学生がいなかつた千葉師範に、その後（史料で確認できる範囲において）、1943年度まで11名が在籍した〔表1〕。1943年度には、モンゴル系の学生が一挙に6名も入学している点に注目されるが、実は他県の師範学校も

〔表1〕 千葉師範学校における留学生一覧（1937～1943年）

	名前	出身地	入学年月	入学時年齢	卒業予定年月	出身校
1	王文增	奉天・蓋平	1937年4月	18歳	1942年3月	熊岳城公学校
2	王徳文	奉天・蓋平	1937年4月	19歳	1942年3月	蓋平公学校
3	博彦務利吉	興安南 ・西科前旗	1940年4月	16歳	1942年3月	満州国立札蘭屯師道 学校
4	巴拉珠爾	興安南 ・東科後旗	1941年4月	20歳	1946年9月	王爺廟臨時初等教育 教師養成所
5	唐国俊	安東	1942年4月	17歳	1947年9月	牡丹江師道学校
6	希利布	興安南	1943年4月	18歳	1948年9月	千葉東亜建設青年訓 練所
7	特博堯士団	興安南	1943年4月	24歳	1945年9月	玉川中学校
8	格万札木蘇	興安南	1943年4月	21歳	1945年9月	省立巴彥塔拉農学校
9	賀喜格套特格	興安南	1943年4月	20歳	1945年9月	省立巴彥塔拉農学校
10	賀希業拉団	興安南	1943年4月	20歳	1945年9月	西省教育教師養成所
11	吉爾嘎朗	熱河	1943年4月	19歳	1945年9月	鹿児島県立市来農芸

モンゴル系の学生の受入れが多い（後に示す【表2】も参照のこと）。たとえば、青森・秋田・岩手の各師範学校は、在籍者3名中2名がモンゴル系。山形は5名中3名、福島女子師範は5名中4名を占めた<sup>(11)</sup>。詳細な理由は不明であるが、漢族系よりもモンゴル系の教師養成が急がれた様子が窺えるように思われる。

さて、留学生の出身校に、若干の説明を加えておきたい。まず「師道学校」は1938年1月から施行された満州国の「学制要綱」内で定められたもので、「鞏固ナル国民精神ノ涵養知識技能ノ修得、身体ノ鍛錬ニ努メシメ、以テ人格ヲ陶冶シ」、「初等教育ノ教師育成ノ為メ」に作られた学校である。「国民高等学校」（満13歳以上となったものを4年間教育する学校）の3学年修了者に入学資格があるとされ、修業期間は2年であった<sup>(12)</sup>。

「千葉東亜建設青年訓練所」の正式名称は「東亜建設青年訓練所」であり、千葉県印旛郡遠山村三里塚（現成田市）に1941年4月設けられた学校である。学校としての「資格区分」は「乙種実業学校認定校（農業）」で、修業年限は3年とされていた。1941年に第一期生28名が入学したが、翌42年は37、38名に増加したとされる。「また昭和17年には留学生が入所しました。満州国のモンゴル人が十五人と聞きましたが、私の記憶では十人前後だったように思います」<sup>(13)</sup>と当時の日本人学生が後に語った回顧が残る。この訓練所になぜモンゴル系の学生が大量に「留学」していたのかについては、現状不明である。

「玉川中学校」は、高名な教育者・小原国芳が1929年に創設した財団法人玉川学園の経営になる学校（旧制）であろう。一方、「鹿児島県立市来農芸」は、現在の鹿児島県立市来農芸高等学校の前身である。市来農芸学校の創立は1934年とされている。それぞれ創設から日が浅い段階で満州国留学生を受入れたのは、なぜなのだろうか。

たった11名だけであるが、千葉師範に在籍した学生たちのデータを一瞥するだけで、様々な経歴、入学経緯があったことが浮き彫りになる。満州国と日本に、あるいは日本国内において、師範教育を専門とする留学生たちの受入れをめぐるどのようなネットワークがあったのかは、きわめて興味深い問題であるが、それらは今後の課題となる。

### ③ 千葉師範学校での学生生活

これら11名が千葉でどんな学習生活あるいは課外活動を行っていたのかについて、個別具体的に説明できる資料は、残念ながら残っていない。したがって、同時代に留日していた他の留学生の活動や往時の回想などを示すことで、多少なりともイメージを作りたい。

#### 1) 見学旅行

千葉師範留学生の中には、日満文化学会（のち東亜育英会）の奨学金を受けていた者がいた。この会は、学生たちに対し、「毎年一回全員に旅費を与へて、東京に召集し、会長その他の役員との連絡、親交に資し、又東京内並に付近各地を役員連行して見学せしめ、留学生の知識増進と日本国の理解に供し、従来多大の効果ありしを認む」という活動をしていた。ここで引用した文は、1942年に作成されたものだが、1941年4月入学の巴拉珠爾までの4名すべてが、この奨学金の対象者であった<sup>(14)</sup>。よって、4番までは勿論である

が、おそらく 5 番以降の学生たちも、これらの体験をしたものと思われる。

なお、外務省は、義和団事件の賠償金を基にして、1923 年から、「対支文化事業」<sup>(15)</sup> を展開し、留学生への奨学金支給や見学旅行費の援助などをしている。見学旅行については、10 日余りの行程で、東京周辺の留学生は、近畿地方から九州に至るまで、西日本の留学生は、東京から東北、さらには北海道まで赴き、それぞれの「日本」理解を深めていくことになる<sup>(16)</sup>。満州国からの学生たちも、規模こそ小さいながらも、同じ意図を持った企画で、東京およびその周辺を知る機会を与えてもらったということであろう。

## 2) 海水浴

中国にはなかった「海水浴」を、中国留学生たちが、日本で初めて体験し、学校外でも「近代文化」を肌で感じ、彼らの健康面だけでなく、精神面や文化的嗜好に少なからぬ影響を与えたことを、筆者はかつて明らかにした。とりわけ、1910 年代以降の房総半島では海水浴が大変人気を呼び、日華学会も館山町に中国留学生向けの専用宿舎を設置するに至る。その結果、1923 年から 41 年まで、午前中は日本語等の講習会を受け、昼からは、海水浴などを自由に楽しむ留学生たちが、ひと夏に優に数百名を越えて滞在していた。当時の新聞には、その賑わいを伝える記事が多々見られ、日華学会の夏季宿舎以外にも、1935 年夏には館山の北に位置する富浦海岸に、満州国留学生 50 名が、翌年にも 15 名が来訪し、水泳の練習や館山海軍飛行場を見学したことが報じられている<sup>(17)</sup>。

こうした夏季休暇中の中国留学生に対する日華学会主催企画は「銷夏団（消夏団）」と呼ばれていたが、太平洋戦争に突入した 1942 年夏に至り、群馬県北部の水上村における「鍊成団」に変えられ、翌年以降も富士山麓などでの修練にシフトしていく。

1936 年 6 月には「満州国留日学生会」が創設されたが、同会も、1937 年の夏から海や山での「修練」を始め、少なくとも 1942 年までは継続実施していた。この会は、戦時下の留学生を管理する意図も持ち、会のバックには、満州国大使館、満州国協和会、日本陸軍、文部省などがあり、「修練」の趣旨も、「国体的精神を涵養し、勤労愛好の精神を養成せしめる為め、全留学生をして留学専くとも一回夏期修練或は冬期修練に参加せしむる事なし、康徳四年（昭和十二年）度より実施せり」とされていた<sup>(18)</sup>。

初年度にあたる 1937 年度の実施内容をごく簡単に紹介したい。まず夏期については三つの部門に分かれ、「田園修練」は茨城県の友部国民高等学校<sup>(19)</sup> にて 1 週間（参加者 16 名）、「山嶽修練」が富士山麓山中湖畔で 2 期に分け、それぞれ 1 週間ずつ行われた（参加者は 42 名と 23 名）。一方、「海浜修練」の開催地として選ばれたのが、千葉県富浦海岸で、3 期にわたり（それぞれ 11 日ずつ）行われた。参加者は、46 名、31 名、22 名で、「田園修練」「山嶽修練」よりも人気があった様子を窺うことができる。

1940 年の「海浜修練」は、10 日間 1 回だけの開催になったためか、120 名もが押し寄せている。1942 年にも、千葉県外房の興津海岸（勝浦町）で 10 日間実施されたが、それでも 57 名の参加を得ている。「修練」とは言いながら、海水浴には人気があったことを忍ば

せる結果となっていた（<sup>20</sup>）。

1944年8月には、山梨県身延山で、日蓮式の説法を受けた後、富士山登山をする夏期鍛成が行われた記録も残る（<sup>21</sup>）。

さて、千葉師範の満州国留学生たちが、これらの課外活動に、どのような形で、どれほど参加したのかは不明である。しかし、少なからぬ人数の満州国留学生たちが、千葉の海岸で、夏を送っていたことは紛れもない事実なのである。

そもそもこれらの諸活動は「修練」と位置付けられており、余暇的レジャー的活動とはもちろん言えない。しかし、それでも留学生たちの日本理解、あるいは日本体験を通じた「近代社会」理解に一定の役割を果たしたものと考えている。こうした視点から、日華学会主催の夏季鍛成会（会場が群馬、富士山麓であり、こちらも「山嶽修練」とも言える）に参加した中国留学生の感想等を別稿（<sup>22</sup>）でまとめた事がある。満州国留学生たちの経験と同一視できるものではないが、資料がない状況ゆえ、参考として示しておきたい。

### 3) 戦時千葉での生活

さて、千葉師範への満州国留学生であるが、1937年4月に2名が入学し、その他の9名は1940年以降の入学であった。この時期は、戦線の拡大と国内の締め付けが年々厳しくなる、きわめて厳しい時期の修学であったと考えられるが、残念ながら当該学生たちが残した記録は現状ではごく僅かしか発見できていない（後に紹介する）。

一方で、筆者は、戦時下の千葉医科大学および千葉医科大学附属薬学専門部で学んでいた元留学生の回想文を以前紹介したことがある。ここでそれを再度見ることにより、同時代を想像する際の一助としたい。

まず、一つ目は、1942年4月に、薬学専門部に入学した台湾学生による回想である。すなわち、元留学生によればこの年は、まだ「平和」な雰囲気があり、学内のレコード鑑賞会に出たり、日比谷公会堂の音楽会に赴くことをしていた。また、千葉は海が近いため、漁師から魚や貝類を分けてもらい、それにたっぷりの野菜を入れて舌鼓を打ったのは、良い思い出で、夏には東京の友人がほとんど毎週のように千葉を訪問し、泳いで帰って行った。友人の楽しみは、泳ぎだけでなく、千葉特産のサツマイモや魚介を食べることにもあった。しかし、43年ころからはかなり状況が悪化してきた云々（<sup>23</sup>）。

もう一つは、同じ1942年に、千葉医科大学に入り、口腔外科を学んだ広東省出身の中国学生である。こちらは1945年の千葉空襲の際、爆弾の破片でケガを負っている。現在ではイメージさえできないが、当時日本で勉学を継続していた中国留学生が存在し、その結果、こうした被害も受けていた点は、改めて肝銘すべきであろう。

この留学生は幸い軽傷で済んだものの、ほとんどの日本人同期生が軍医として召集され、授業が成り立たない状況になったため、長野県出身の同期生の父親に手紙を書き、同地で1年間医師として働いていたという。そして、そこで乗馬やスキーを体験したり、「はかないロマンス」さえあったと回顧している（<sup>24</sup>）。

さて、以上は2つとも、長命を得た元留学生が晩年に行った回顧であり、同時代の現実と記憶とがやや異なる可能性もあるが、1942～45年ころの千葉あるいは日本での留学生活の一端を垣間見ることはできるだろう。

なお、千葉市は1945年6月10日と7月7日の二度にわたり、空襲を受け、その際、千葉医科大学は全焼している。また千葉師範女子部も空襲の被害に遭い、学生8名、教員2名が命を落としている<sup>(25)</sup>ことを付言しておきたい。

#### ④ 卒業後の千葉師範学校留学生

千葉師範学校への留学生たちが、その後どのような歩みを続けたかは、不明である。そもそも旧師範学校時代の卒業生名も収録している『教育学部同窓会会員名簿』に誰ひとり載っていないのが謎である。医学部、薬学部、工学部、園芸学部の名簿は戦前戦中期の留学生名も収録されているのだが、教育学部の場合はそうならない。常識的に考えれば、「同窓会名簿」なので、「中退」したため掲載されていないと考えるのが穩当であろうか。特に1945年8月段階で在籍していた学生にとって、敗戦と「満洲国瓦解」はきわめて大きな出来事であった事は間違いないのだが、実際はどうだったのだろうか。

現在、唯一、「その後」が分かるのは、最初の留学生・王文增である。周軍氏による論文「『満州国』留学生と広島高等師範学校」<sup>(26)</sup>によれば、王は1937年4月から5年間、千葉で学んだ後、1942年4月に広島高等師範学校文科一部甲に入学を果たしているという。広島高等師範に入学できたということは、千葉師範も「卒業」していたのではないかと思われるが、真相は不明である。

さて、この王は「満州国留日学生会」が発行していた『満洲国留日学生会会報』誌上に、複数の寄稿をしている。王の文章には、広島駅から郊外の可部駅に向かう風景が、東京・千葉間に似ているので、「何だか再び千葉へ帰った様な気がしてならなかった」云々。また別の投稿では、繁華な広島市で「もう千葉から来た当時と違って、走るバスやトラック等が癪にさわるやうなこともなく、聊か田舎者の皮が抜け始めてきた」の表現がある。後者は「雨傘」という題名の隨想だが、この修繕に出した「傘は千葉師範時代に先輩から戴いたもので、よい紀念品だ」<sup>(27)</sup>と千葉時代を懐かしむ内容も含まれている。

帰国した後の王が、どのような仕事に就いたのかを知るすべはないが、一方で周氏の論文は、広島高師を1932年から1943年の間に卒業した満州国留学生たち24名の就職先を明らかにしている。それによれば、教育関係に就いたのは半数の12名で、建国大学講師を先頭に、国民高等学校や師道学校などで教鞭をとったという。残りの12名のうち8名は、協和会中央本部、奉天省公署などの官公庁に勤務し、また4名は官吏養成機関である大同学院で研修を受けたとする。つまり、日本の高等師範学校留学という経験を買われた若者たちは、満州国の中でかなり高い地位に就くことを得た様子が窺えるのである。

千葉師範への留学たちは、日満文化学会（東亜育英会）の奨学金を受給していたこと（後述）もあり、帰国後は、初等教育の現場に携わったものと思われる。しかし、満州国が瓦

解していく動乱の中で、彼らはどのような人生を送っていったのだろうか。

## 2. 満州国における師範系留学生の日本派遣とその特質

### ① 満州国留学生をめぐる法令など

満州国の留学生政策の特色を、1936年に出された「留学生ニ関スル件」、「留学生規程」、そして1937年の「留学生須知」（1940年に「留日学生心得」と改称）から見ていきたい。このうち「留学生須知」には、日本留学の目的が「留日学生ハ将来国家ノ中堅トシテ日満一体ノ楔子タルベシ本分ヲ自覺シ進ンデ留学生ニ關スル諸規定ヲ実践シ品位体面ヲ重ンジ日夜心身ノ修練學術ノ研鑽ニ精励シ以テ國家ノ期待ニ背クコトナカルベシ」<sup>(28)</sup>と「日満一体」の理想を実現するため、精励せよ、という使命が示されていた。

そして、この留日学生になるためには、満州国民生部による「留学認可」を得る必要があったが、そのためには、留学生認可試験に合格するか、あるいは指定された留学生予備校卒業者であることが条件とされていた。日本に留学した後も、民生部大臣の厳密な管理に置かれ、許可なく転校や転科をした場合は、留学資格を取り消す権限も握られていた<sup>(29)</sup>。

一方、満州国民生部の意向を汲む形で、1938年、日本の文部省は、留学生を受け入れるための「学席」を設置する（200名の選抜を予定し、7割が理系、3割が文系と想定されていた）。まずは工業専門学校、農業、農林専門学校を中心であったが、次第に工鉱業系が相対的に増やされていったという<sup>(30)</sup>。

ここで、満州国からの留学生のうち、在籍校を「公私立大学、高等師範学校（大学師範部を含む）、高等専門学校に限る」および「男子留学生」と限定した資料に基づき、先行研究がまとめた「学科別入学者一覧」を参照に、その概況を記しておく<sup>(31)</sup>。

すなわち、1932年の3名（師範科2、農学科1）を皮切りに、1934年に138名、35年308名と急増し、1938年の561名がピークとなる。その翌38年には180名と3分の1に激減する。もちろん1937年7月の盧溝橋事件の影響が如実に表れたものと考えられる。そして、1939年、40年に156名まで減り、1941年で215名に復したところで終わっている。学科別は、師範科、法学科、政治科、経済科、商科、文学科、理学科、医学科、工学科、農学科、芸術科、外語科の12にも分けられているが、累計4454名のうち、最も人数が多かつた学科は、意外にも954名の商科であった。ついで政治科の680名、法学科621名、工学科526名と続き、師範科は第5位の445名であった。ついで経済科の410名、医学科377名であり、上位に入ると思われた農学科は302名で第8位に留まった（以下、文学138、理学64、芸術21、外語16）。つまり、このデータ整理に限って言えば、「専攻」としての「師範（教育）」は中程度の期待度であったという評価になるだろうか。

### ② 満州国の教員養成の現実

1932年に「建国」された当初の教育の現状は、「張学良の時代になってから、（略）全科

目を通じて、三民主義の理想を鼓吹することに専念したのであり、而もその取扱は、著しく排外的、特に排日的であつた。それは満州国の建国精神に反するものであるため、「かかる誤れる教育を如何にして根本的に是正するか」<sup>(32)</sup> が課題となっていた。そのため、1937年5月に新しい「学制要綱」が公布され、翌38年1月から施行されることとなる。その冒頭に掲げられた「教育方針」は、次のような内容であった。

日満一徳一心不可分ノ関係、及ビ民族協和ノ精神ヲ体認セシメ、東方道徳、特ニ忠孝ノ大義ヲ明ニシテ、旺盛ナル国民精神ヲ涵養シ、徳性ヲ陶冶スルト共ニ、国民生活ノ安定ニ必要ナル実学ヲ基調トシテ知識技能ヲ授ケ、身體健康ノ保護増進ヲ図リ、以テ忠良ナル国民ヲ養成スルヲ教育ノ基本トス。<sup>(33)</sup>

つまり、日本と満州は「不可分」であること、「国民精神」を養成し、「忠良ナル国民」になる必要があること、そして実質的には、日本側に協力する姿勢を育むことが求められることが「教育ノ基本」に置かれたのである<sup>(34)</sup>。

また教員養成については、1933年に再教育機関である教員講習所が、翌34年には教員養成学校である師道学校が設立される。師道学校はすべて官立てで、満州国は教員養成を国家の統制下に置いた。この師道学校での教育は日本語、日本に関する知識、建国精神が重視されたが、受講する学生たちには違和感を覚える内容であり、しかも財政不足により教員の待遇がよくなかったため、志願者は少なかったとされる<sup>(35)</sup>。

一方、日本語が日本人以外の民族の通う小学校で教えられはじめたのは、1934年からで、3年生に対し週2時間の学習が義務化されるが、同時期の朝鮮では1年生から週10時間以上教えられていたのと比べ、大きな差があった。「日本語教育が普及しなかった最大の原因是、日本語教師の絶対数が不足していたことである。広大な満洲国全土の小学校に日本語教師を配属することは、すぐにできることではなかった」<sup>(36)</sup> という状況であった。

そのため、満州国で、子どもたちを適切に教育できる「満洲人」の人材が大いに求められてきたのは、当然の流れであろう。

### ③ 現職教員の日本留学

満州国は、教員、司法官、警官、軍人、技師などの社会人も日本に派遣したが、留学認可試験は不要で、滞在費や家族手当を支給されるなど、相當に恵まれていたという<sup>(37)</sup>。

「大同二年（1933年）四月以来、新京南嶺に直轄の教員講習所を開設し、地方教員講習会を全国各地に開催し、且つ日本へ教員留学生を派遣して、教員の素質の向上改善を図った」<sup>(38)</sup> と1940年出版の書物が記すように、現職教員の派遣は1933年7月から始まった。これを「満洲国文教部派遣留学生<sup>(39)</sup>」と呼び、五期にわたる派遣が行われた。

第一期生は同年7月から翌年6月までで、24名が、東京高等師範学校（10名）、広島高等師範学校（10名）、玉川学園（4名）にそれぞれ派遣された<sup>(40)</sup>。

第二回は、1934年4月から翌年3月までで、人数は17名。内訳は、東京帝国大学農学部5名、東京工業大学6名、東京高等工芸学校1名、熊本高等工業学校4名、共立女子職

業学校 1 名であった<sup>(41)</sup>。

第三回は、1934 年 11 月から翌年 10 月まで、20 名が、東京高等師範に 7 名、広島高等師範 7 名、玉川学園 5 名、日本女子大学に 1 名がそれぞれ留学していた<sup>(42)</sup>。

第四回は、1935 年 9 月から翌年 8 月。総数は最も多い 32 名で、派遣先は、東京高等師範 9 名、広島高等師範 8 名、東京女子高等師範 3 名、東京青山師範 2 名、愛知第一師範 2 名、京都師範 2 名、大阪天王寺師範 2 名、広島師範 2 名、福岡師範 2 名だった<sup>(43)</sup>。

第五回は、1936 年 4 月から翌年 3 月。派遣数は 20 名。内訳は、東京高等師範 7 名、広島高等師範 7 名、東京青山師範 2 名、京都師範 2 名、大阪天王寺師範 2 名だった<sup>(44)</sup>。

このうち、第二回派遣者の中には、千葉大学工学部の前身にあたる東京高等工芸学校で学んだ学生が一人いる。馬克清がその人で、彼は奉天高等師範学校数学理化科を卒業した後、1 年間、東京高等工芸の「印刷工芸科 選科生」として学んだ。帰国後は 1942 年度まで奉天省立第二工科学校の教員をしていたことが明らかになっている<sup>(45)</sup>

#### ④ 日本の師範系学校への満州国学生派遣

さて、千葉師範学校への留学生の整理を課題とする本稿であるが、現状で確認できた 11 名の留学生すべてが満州国出身であった事は既に見たとおりである。

そこで、本項では、日本全国の師範系学校に何名くらいの満州国学生が在籍していたのかをまとめ、その傾向や性格を多少なりとも明らかにしていきたい。

次にあげる〔表 2〕は、1931 年から 1943 年までの①各府県師範学校への留学生数、②師範系学校留学生総数、③満州国日本派遣留学生総数、④師範系学校が全体に占める比率、⑤留学生における「中華民国」と「満州国」に分けた年次実数などを示したものである。本表を作成する際には、1935 年から 43 年まで「駐日満洲国大使館」が出していた『満洲国留日学生録』（以下『満州録』と略）を利用した。この一冊目は、1935 年 6 月のデータを「康徳二年六月現在」として 36 年 2 月に出版され、以来「康徳十（1943）年十月現在」版（1944 年 1 月出版）までが確認されている（康徳九：1942 年版のみが存在不明）。

また、『満州録』が出されていない 1934 年以前の留学生数確定については、中国留学生の受入れ団体であった日華学会が作成した『留日中華学生名簿』（以下『留日名簿』と略）を用いた。この名簿は 1927 年から発行されているが、本稿では、1931 年版以降を参照とした（ちなみに 1931 年版は「昭和六年五月現在」とされ、9 月 18 日の柳条湖事件が起きた前の数値が収められている。また満州国の「建国」は 1932 年 3 月 1 日であるが、1932 年版は「昭和七年六月現在」とされており、「建国」後の集計になっている）。

なお、この『留日名簿』からの満州国出身者の抽出であるが、1931 年版においては、省別一覧中の遼寧、吉林、黒竜江、熱河の 4 省出身者を、1932 および 33 年版では、奉天、吉林、黒竜江、熱河の 4 省出身の学生を、便宜的に満州国出身者としてカウントした。

[表2] 「満州国」の師範専攻留学生と日本の受入れ校 (1931~1943年)

	1931年	1932年	1933年	1934年	1935年	1936年	1937年	1938年	1939年	1940年	1941年	1943年
千葉師範学校							2	2	2	3	4	8
東京高等師範学校	39	33	14	35	57	57	62	61	51	38	31	22
東京文理大学	2	2	3	2	4	1	1				1	1
東京女子高等師範学校	4	4	3	1		5	3	3	3	2	1	
奈良女子高等師範学校	2	2	2	2	4	5	9	12	21	26	32	23
広島高等師範学校	10	7	4	22	36	49	36	36	36	31	34	23
広島文理大学	1	3	3	3	2	1	1			3	5	7
青森県師範学校						7	5	3	5	4	4	3
秋田県師範学校					2	2	2	3	2	3	3	3
岩手県師範学校											1	3
山形県師範学校										2	3	5
福島県女子師範学校									2	3	4	5
栃木県師範学校					1	1	1					
東京都青山師範学校						4						
山梨県女子師範学校											2	4
新潟県新潟師範学校					2	2	3	2	3	3	3	1
新潟県高田師範学校					1	2	2	2	4	3	3	3
新潟県長岡女子師範学校					2	3	3	4	3	3	4	4
長野県師範学校											3	5
長野県松本女子師範学校							1	2	2	3	4	4
富山県女子師範学校										2	3	5
静岡県師範学校												4
愛知県第一師範学校						2						
岐阜県師範学校										2	3	3
京都府師範学校						4						
大阪府天王寺師範学校						4						
和歌山県師範学校												1
兵庫県師範学校												1
広島県師範学校						2						
福岡県師範学校						1						
青森県立青年学校教員養成所					3	5	3					
熊本県立青年学校教員養成所					7	5	3					

戦前期における千葉師範学校（現千葉大学教育学部）の留学生たち

早稲田大学高等師範部							1	1	1	1		
日本大学専門部高等師範部						3	1	1				
駒沢大学専門部高等師範部							3	2				
師範系学校総計（A）	58	51	29	65	121	162	140	135	138	132	149	138
「満州国」留学生総数（B）					<u>1269</u>	<u>1867</u>	<u>2017</u>	<u>1519</u>	<u>1325</u>	<u>933</u>	<u>1256</u>	<u>1004</u>
	578	311	311	749	1133	1805	1939	1624	1304			
(A) / (B) の百分比	10.0%	16.4%	9.3%	8.7%	10.7%	9.0%	7.2%	8.9%	10.6%	14.1%	11.9%	13.7%
「満洲」以外の学生総数（C）	2518	1110	1106	1591	2648	4104	3580	1508	1023	1204	1466	1380
中国留学生総数（B+C）	3096	1421	1417	2340	3781	5909	5519	3132	2327	<u>2137</u>	<u>2722</u>	<u>2384</u>
(年次)	1931年	1932年	1933年	1934年	1935年	1936年	1937年	1938年	1939年	1940年	1941年	1943年

1934 年版および 35 年版からは中華民国と「満州国」の学生数が別記されているので、後者の数をそのまま利用した。1936 年版は「中華」の文字が消され、『留日学生名簿』となり、1937 年版からは逆に『中華民国満洲国留日学生名簿』という名称に変わるが、2つの数字が併記される状況は変わらない。しかしながら、1940 年版からは『中華民国留日学生名簿』と名称が変わり、ついに、「満州国」学生名簿（および統計資料）は外され、この年度以降は『満州録』のみを頼りにするほかなくなる。

ところで、『留日名簿』と『満州録』で示される留学生数等が異なるという非常に困った状況があることにも触れておかざるを得ない。すなわち、2つの名簿の特定学校での数値が異なる箇所が複数ある。その場合は便宜的に数字が多い方を採用した。また、本データの整理作業において、1931 年から 33 年までは『留日名簿』上に見える「満州国」とされた地域の学生数と「それ以外」の地域からの留学生数を弁別した上で、合算したものと「総数」として示す方法を取った。その後 1934 年から 39 年までの『留日名簿』は、「出身国別」に分かれているため、それをそのまま利用した。しかしながら、なぜ故か、この『留日名簿』と『満州録』の数値が、最大で 90 名もの違う現象が生じている。そこで、『満州録』の数値には二重線を付し、併記することにした。一方、1940 年以降の『留日名簿』は「中華民国」留学生の数しか載せていないため、「総数」は、それに『満州録』の数値を合算したものとした。それ以前と数字の性質（計算法）が異なると言え、表 2 では、一重線を付し、注意を喚起している。

さらに『満州録』自体にも問題がある。すなわち、この名簿の各年版では、留学生数を数年分遡って示しているのだが、「発刊された年次に公表された人数」と「遡って示した数年前の人数」が異なっているケースが少なくないのである。後に、誤りが発見され、修正したのかもしれないが、本稿では、基本的に発刊された年次の数を示すこととした。

データをめぐる説明がいたずらに長くなってしまったが、表 2 の特色を簡単にまとめておきたい。まず師範専攻留学生の派遣先（受入れ校）であるが、やはり東京と広島の高等師範学校が第一位と二位を占め、他校を大きく引き離している。先に示した「現職教員の

「日本留学」でも五期にわたる 113 名の派遣者のうち、東京高師が 33 名、広島高師が 32 名と両校で全体の半数を越えており、師範系は高等師範でしっかり学んでもらう、そして、おそらくは両校への留学生を教育界の幹部候補生とする方針が徹底していたようである。

なお、余事ながら、東京高師の校長を 1893 年から 20 数年余も務めたのは、「近代柔道の父」と称される教育家・嘉納治五郎（1860～1938）である。嘉納は、1896 年に清国がはじめて日本に留学生派遣をした際の受入れの中心的役割を担っていた人物としても知られ、そもそも嘉納あるいは東京高師は、中国留学生教育と深い関わりがあったのである（<sup>46</sup>）。

一方、女子師範での受入れは、奈良女子高等師範がもっとも多く、東京高等師範がそれに次ぐ。地方の師範学校への入学は 1935 年の秋田・栃木・新潟・高田・長岡女子師範学校がその嚆矢となるが、地方への派遣が本格化するのは、翌 36 年からである。先に触れたが、1937 年 5 月に公布された新しい「学制要綱」の目的を果たすために、師範学校派遣事業も重要な役目を担わされた様子が窺えるだろう。さらに、高等師範学校のみではなく、地方の師範学校にも教員候補生を広く受入れてもらい、満州国の初等教育を担う人材に「日本から学ぶ」ことを求めたのではないだろうか。

ところで、満州国の留学生を受入れた師範学校の所在地は、青森、秋田、福島、新潟、長野など特定の地域に集中する傾向が見て取れる。関東地方では、栃木が先駆となったが、1938 年以降は、千葉だけが受入れ校になっていく。一方、また、東京や大阪の師範学校は、1936 年に 4 名という比較的大人数を受入れたが、その年次だけで終わり、爾後は受入れていない。なぜこのような形になったのだろうか。

実は、その理由は、留学生に奨学金を給付していた「東亜育英会（日満文化学会）」をめぐる資料から明らかになる。すなわち、この会は、「満州国誕生して、我邦との間に密接不可分の関係を生ずるや、我等は彼の国の優秀なる年少子女を、我邦に於て学修せしむると共に、親しく我邦を認識理解せしめ、一は以て彼の国文化の向上発達に寄与せしめ、他は以て両国の親善結合に貢献せしむることの意義極めて深きものある」と考えた有志が 1934 年 1 月に日満文化学会を創立し、それが 1941 年 8 月、東亜育英会と改称したものである。具体的には、師範教育に関わる留学生に対し、年額 360 円の奨学金を与え、日本各地の県立師範学校で学ばせた。そして、1934 年から 1940 年までに（この資料の発刊年次は 1942 年であった）、日本の師範学校を卒業した者が 12 名、現状在学が 44 名にのぼり、「着々と所期の目的を具現しつつある」（<sup>47</sup>）とされ、事業がうまくいっていることを示唆している。

この会の奨学生になるための選抜は、満州国政府に一任するとされたため、両国の意向を体すると見なされた学生が選ばれたであろう。そして、より注目されるのは、派遣先学校を選定するときの留意事項についてである。すなわち、「日本内地の東北、北陸其の他人情純朴にして風俗淳美、質実剛健なる地方の小都市に在り。且つ寄宿舎を具備する学校を選定し、東京、大阪等の大都市を避く」（<sup>48</sup>）ことが、その原則とされたのだ。

地方の師範学校に派遣された留学生のほとんどは、この奨学生と考えられ、そのため、「風俗淳美、質実剛健」とみなされた東北地方や信越地方の師範学校への在籍が多かった

のだろう。千葉師範学校は、東京に隣接してはいるものの、千葉市が小規模な街であったため、「純朴」な地域と認識されたものと推測される（元来人口が少なかった「千葉町」が「千葉市」へ昇格したのは1921年であり、それは全国の県庁所在地の中で最も遅い部類であった）。また女子高等師範への派遣数が、東京よりも奈良が多かったことを先に見たが、そうした事情が背景にあったのではないかと推察される。

1943年度の留学生も同様に東京の学校への入学者ではなく、20数名がみな「地方」の学校に進んだ。それは「満洲國の方針に合致したものだったが、もう一つ当時戦争で日本国内の状況が悪くなっており、「疎開」の意味があった」<sup>(49)</sup>という解釈もなされている。

##### ⑤ 戦時下における留学生たちの生活

前章で、「戦時下の千葉」で生活していた中国留学生の状況について、ごく簡単に紹介した。一方、「師範系留学生」全体における特色を詳細に示すことは現時点ではできないものの、本章でも日華学会の史料や留学生自身の回想などに基づいて、当時の概況を一部復元しておきたい。

まず、前章で触れた「余暇活動」に関して、である。これについては、1940年に日華学会が実施した留日学生（中華民国学生）へのアンケート調査が残されており、筆者はかつてその概要を整理したことがある<sup>(50)</sup>。その調査では、日本語学習や日常生活について、35項目もの質問をし、312名（当時の中華民国籍の留学生は全体で1000名ほどだった）から回答を得ていた。

その一つの問い合わせ、「休日を如何に暮らすか」について、全体の31%が「散歩遠足」、30%が「映画」と答え、それ以外では「名所見物」19%、「友人訪問」13%などに分かれた（複数回答可としており、各回答をそのまま全体人数における比率として算出した）。「何か日本趣味に親しんでいるか」については312名中、無回答が95名（30%）、「特になし」が71名（23%）で、それらで半数を占めた。具体的記述の第一位は「相撲」で19名、二位「歌謡・歌」12名、三位「礼儀作法の尊重」で11名だった。それ以外は一ヶタの得票ながら、65種類もの多様な回答が挙げられた。そのなかには、「能」のような伝統芸能から、「畠生活」、「海水浴」、「野球」、「電車中の読書」、「百貨店の正札」、「日本の美人と話すこと」、「大学生の汚い角帽」など現代風俗に至るまでの項目が雑多に示されることになる。

現在から振り返ると、1940年は「極めて息苦しい困難な時代であった」と認識しがちである。そしてもちろん中国（満州国）学生が日本社会からの差別的視線を感じる場面も多々あつただろう。しかし、1940年においても「留学生」として、それなりに「楽しく」暮らしていた瞬間もあったことを全く無視してはいけないと考えている。

また、「大学に入学した感想」については、50%が「学問の熱情旺盛、アカデミックな雰囲気、教授や学生の親切」を挙げていた。「留学生仲間と先生のご自宅を訪ね、いろいろ有益な話を聞くことができた。表面上は軍国主義を擁護せざるを得ず、口には出せなかつたが、日本は敗れると思っていたようだ」<sup>(51)</sup>との証言を戦後に行っている元留学生もいる。

さらに、元留学生が戦後に吐露した証言のなかには、「日本語を勉強したのは、マルクス主義を知るためです」<sup>(52)</sup>のような内容が少くない。すなわち、一部の留学生たちにとっての日本とは、1930年代後半の中国で目を通す事ができなくなっていたマルクス主義関連の文献を比較的容易に入手できる場所であり、実際に日本語に翻訳された関連書を読み漁っていたとする回想も多い。1939年に来日したある学生は、管理が厳しい満州国留学生会館に住んでいたので、マルクスやレーニンの文献を読むことは危険きわまりない行為ではあったが、細心の注意を払って、熱心な読書を続けたという<sup>(53)</sup>。

さて、以上は主に1930年代後半から40年代初頭の状況であり、本稿で扱ってきた下限の時期である1943年度以降は、留日学生もさらに厳しい状況に置かれてきた。1943年12月には、政府が「都市疎開実施要綱」を発表し、東京など重要都市の人員、施設、建築物の疎開を指示する<sup>(54)</sup>。それを受け、各国外交機関も郊外への移転を模索はじめるが、留日中華民国学生を管轄していた「駐日学務専員弁事処」の事務所は、杉並、練馬などに転々と移っていく。また1944年4月には日本政府側が、「中華民国留日学生輔導臨時総本部」を作り、国内で学び続けていた中華民国学生を一ヶ所に集め、「集合教育」をし、また輔導管理しようという案が議論され始めてきたという。

一方、満州国留学生への対応はどのような方向に向かっていったのか。実は、「日満一体」を旨としていた両国関係であるがゆえ、戦時下においても、日本人学生と同様の扱いが求められることが多かったという。しかし、1944年6月には文部省学徒動員本部から、「満洲国留日学生の勤労動員に関する件」が出され、卒業を実質的に繰り上げ、満州国で軍事的生産活動に従事することを促されるようになる。さらに6月15日には、理科系の一部の学生を除き、留学停止、帰国勤労奉仕の命令が出された。

日本に残された理科系の学生たちは、京都帝国大学、東北帝国大学、盛岡工業専門学校、盛岡農業専門学校などに集合させられ、学びを継続したが、1945年8月に入ると、留日学生全員を四回に分けて帰国せしることに方針が変わる。三回までは順調に行つたのだが、最後の30余名は、朝鮮・羅津に向かったものの、ソ連の参戦により爆撃されることを恐れ、結局、敦賀港に戻って「終戦」を迎えることになったという<sup>(55)</sup>。

### [補論 千葉県内の旧制中学校に留学していた満州国学生]

『満洲国留日学生録』をひもとくと、1941年に、千葉県八日市場町にあった千葉県立匝瑳中学校（現県立匝瑳高等学校）に丁達三（当時16歳、龍江省齊齊哈爾、齊齊哈爾第三国民高等学校出身、1946年3月卒業予定）と石志達（17歳、安東省安東、安東第三国民高等学校出身、1946年3月卒業予定）の2名が入学していたことが分かる<sup>(56)</sup>。さらに、2年後の1943年版の名簿には、3年生として在籍している丁、石に加え、包文啓（19歳、吉林省、前郭旗国民優級学校出身、1947年3月卒業予定）が新入生に迎えられた。

千葉県内の他の中学校には、満州国からの留学生はいなかったが、この1943年度は、全国の公私立の中学校（旧制）46校に86名<sup>(57)</sup>が留学していた（表2によれば、1943年

## 戦前期における千葉師範学校（現千葉大学教育学部）の留学生たち

の全留学生は 1004 名なので、全体の 8.6% に当たる）。たとえば、東京都立第二中学校（現立川高校）、玉川中学校（玉川学園高等部）、茨城県立水戸中学校、群馬県立富岡中学校、埼玉県立浦和中学校、長野県立松本中学校、静岡県立浜松中学校などなどで、各校に 2～3 名（最大で 5 名）が在籍していた。玉川中学校を経て、千葉師範に入学した学生がいたが、このような経路で高等教育機関に進む予定であった学生も何名かいたのだろう。

なお、ちょうど同じ時期である 1943 年 9 月に、「満州国留学生」として来日し、茨城県太田中学校（旧制）で学んだ韓慶愈（1926～）という人物の聞き取り録が残る。詳しく紹介する暇はなくなったが、太田中学校に留学生はゼロだったこともあり、校長はじめ教職員、学生からはとても親切にされ、思いのほか楽しい学生生活を送ったという<sup>(58)</sup>。

この韓の事例を紹介したのは、八日市場町で学んでいた留学生、千葉市で学んでいた留学生の具体的資料が乏しいためで、それの多少の代替としたい。

### おわりに — 満州国留学生たちの戦後

本稿は、『満洲国留日学生録』（1935～43 年）中に看取できた千葉師範学校への留学生のデータを示すことを最小限の課題とした論考である。当時の満州国の日本留学政策や同時期の留学生たちが日本のどの地域に派遣されたのか等も併せて示し、多少なりとも普遍的な内容になるような努力をしてきた。しかし、関連資料が乏しく、不十分な内容にとどまった。千葉師範学校で学んだ 11 名が、在学中、帰国後、日本の敗戦後、新中国的成立後、日中の国交回復後、どのような人生を送ったのかは極めて興味ある問題だが、ここで紹介することも現状ではできない。

本稿では、内容の不足を補うため、浜口裕子氏が聞き取りなどの資料をもとに、その半生を具体的に示した孫平化（1917～1997）および韓慶愈（1926～）の「経験談」をしばしば用いさせてもらった。本稿のこの「おわりに」は、「満州国留学生たちの戦後」という大きなサブタイトルを付し、その上で、再度、浜口氏の研究成果を援用するのは心苦しいが、千葉師範学校の卒業生も同様な人生を歩んだ可能性があるため、あえて使わせていただく<sup>(59)</sup>。

まず孫平化であるが、彼は『中日友好隨想録—孫平化が記録する中日関係』（上・下巻、日本経済新聞出版社、2012 年）ほか多くの回想を残している。ここでは「満洲事変・日中戦争から戦後民間外交へ」という明確なサブタイトルを持つ浜口氏の著作『満洲国留日学生の日中関係史』の「まとめ」の部分を引用し、孫（および孫のような人物たち）の辿った生涯を振り返りたい。

戦争中、日本と満州国は日本の傀儡国家である満州国の運営を担う「人材」を育成するため、留学生を日本に派遣した。留日学生は、満州国に貢献することを期待され、半ば強制された。留日学生は、組織的な監視下に置かれたが、一部の学生はそんななかでも、水面下で抗日活動に励んだ。この限りにおいて、日本の政策は意図した目的

とはまったく逆の効果を生み出した。だがそれらの「抗日組」も中華人民共和国においては、対日政策を担う貴重な人材として、活躍の場を与えられることになった。

( p 216)

一方、韓慶愈は戦後中国において、孫ほどの高い地位には就かなかったものの、「日本語力」等を活かした活躍をし、米寿を迎えた2014年段階でも、精力的に日中関係の仕事に携わっているという。その韓についての浜口氏の「まとめ」は以下となっている。

韓は「満洲国時代の日本や日本人の「横暴さ」を語る時には恐怖の表情を浮かべ、国をとられた民族の悲哀について「あんたなんかには絶対にわからない」と厳しい言葉を投げかけた。(略) 印象的だったのは「私の第二の故郷」として常陸太田をあげたことである。戦時中自らの意志に反し過ごすことになったのだが、常陸太田での生活を語る時の韓慶愈は穏やかで懐かしんでいるように見えた。「若い、人生形成の時期に経験したことは大きいんだよ」。「苦しい時にはいつだって「質実剛健」と繰り返してきたんだ。「質実剛健」は太田中学の校訓だったんだ。韓慶愈の中に確かに息づく日本への思いを垣間見た瞬間である (p 228~229)。

はたして千葉で学んだ元留学生たちは、どのような戦後を歩み、どのような「記憶」を残していくのであろうか。

#### 【付録】戦前期における千葉県域の軍事系学校の留学生たち

「満洲国皇帝」愛親覚羅溥儀の弟・溥傑（1907～1994）が、かつて留日学生であったことを、知っている人は少ないだろう。しかも、千葉市で学んでいたことをや。

溥傑は千葉市作草部にあった陸軍歩兵学校に1936年8月入学した留学生であった。翌1937年4月3日、侯爵家・嵯峨実勝の長女・浩と日本で結婚をするが、まだ在学中であった。そのため、新婚時代は、海水浴場あるいは保養地として知られていた稻毛海岸に住み、馬に乗って、学校に通っていたという（当時の家は現在も残り、千葉市が「稻毛ゆかりの家・いなげ」<sup>(60)</sup>として一般公開している）。

浩が後に回想した文章によれば、「私たちの新婚生活は静穏で、つましく、充ち足りたものでした。そうした平和な空気を打ち破ったのは、日本と中国とのあいだに起こった戦争でした」云々。すなわち、新婚生活は順調に進んでいたのだが、7月に盧溝橋事件が起こり、9月には急いで満州国に帰ることになったのである。

ところで、稻毛時代を振り返る浩の文章の中に、「日曜日になると、中国から来ている留学生たちがどっと押しかけてきました。当時は「反日」とか「抗日」の運動がさかんになっていた時代で、中国人留学生というと、ちょっとしたことでも特高に引っ張られていきましたから、私どもの家に遊びにきていると、安心だというのです。私には政治とか思想はよくわかりませんでしたが、私たちの家にきていることによって、特高から逃れられるものなら、それもよいではないかと考え、精いっぱい接待してさしあげました」<sup>(61)</sup>とい

うくだりがある。

ここに出てくる「中国人留学生」とは、どのような人たちだったのだろうか。1937年3~7月当時、千葉市にあった軍事系学校で学んでいた留学生は、満州国国籍、中華民国国籍ともにゼロで、溥傑が唯一の留学生だった。一方、千葉医科大学には、中国大陆出身者が11名いた（1名が満州国出身。10名は中華民国。ほかに台湾出身者が4名<sup>(62)</sup>）ものの、彼らが「満洲國皇帝」の弟の新婚家庭を気軽に訪問するとは思えない。

実は、溥傑は千葉の陸軍歩兵学校に入学するまで、かなり長い間日本留学を続けていた。すなわち、まず1930~32年度は学習院で学び、1933~34年度は「陸軍士官学校満洲国将校候補生」（同期生11名）、さらに1935年度は「陸軍士官学校満洲国学生隊」（同期生17名）の肩書を持って留日していた<sup>(63)</sup>。

その後、1936年8月、陸軍歩兵学校に入学することになるのだが、同校の留学生は溥傑一人であった。同じ千葉県内（千葉郡二宮町）にあった陸軍騎兵学校には、潤麒（溥儀の皇后であった婉容の実弟。1930年に一緒に来日し、学習院から陸軍士官学校まで、ずっと同窓であった）が入学した<sup>(64)</sup>が、それ以外に千葉県内の軍事系学校にも、満州国学生、中華民国学生はいなかったのである。

つまり、行き来をするような仲間は潤麒を除けばさほどいなかったと思われるのである。一方、東京の軍事（陸軍）系学校の満州国留学生は、陸軍大学校10名、陸軍経理学校4名、陸軍軍医学校7名、陸軍士官学校30名もいた<sup>(65)</sup>。こうした状況を勘案すれば、1937年前半に溥傑宅を訪問したのは、陸軍士官学校時代の知り合いではなかっただろうか。

やや横道に入ってしまった。「留学生・溥傑」の話はここで終え、「戦前期における千葉県域の軍事系学校の留学生たち」の本題に入りたい。

留学生が実際に在籍し『留日中華学生名簿』に名前が掲載された東京周辺の軍事系学校は、①陸軍大学校（東京市赤坂区青山北町）、②陸軍士官学校（東京市牛込区市ヶ谷本村町）、③陸軍軍医学校（東京市麹町区富士見町）、④陸軍獸医学校（東京府荏原郡世田谷町）、⑤陸軍経理学校（東京市牛込区若松町）⑥陸軍砲工学校（東京市牛込区若松町）、⑦陸軍歩兵学校（千葉県千葉郡都賀村；千葉市稻毛区作草部）、⑧陸軍騎兵学校（千葉県千葉郡二宮町：船橋市）、⑨陸軍野戰砲兵学校（千葉県印旛郡千代田村：四街道市）、⑩陸軍工兵学校（千葉県東葛飾郡明村；松戸市）の10校である。そのうち4校が千葉県域にあった。

『留日中華学生名簿』によれば、これら4校に留学生が在籍していたのは、1932年までで、それ以降は在学者名の記載はなくなる（他の学校=陸軍士官学校および陸軍経理学校には、1939年度までは満州国学生が在籍していたことを確認できる）。一方、『満洲國留日学生録』が最初に作成された1937年度版には、溥傑、潤麒の名前および士官学校留学生などの在籍者名がみえる。しかしながら、38年度以降の『満洲録』は、軍事系学校の所属者が名簿上から抹消されている。その年から軍事系留学生がゼロになってしまったとは考えにくいので、何らかの事情により、公開をしない方向に転じたのだろう。

さて、上記名簿を整理すると、1927年から1937年の間に、千葉県域にあった4つの軍

事系学校のうち、陸軍歩兵学校に 41 名、陸軍騎兵学校 10 名、陸軍野戦砲兵学校 45 名、陸軍工兵学校 10 名、総計で 106 名が、軍事関連の教育を受けていたことが分かる。

それぞれの学校の来歴と教育内容をごく簡単に紹介しておくと、まず陸軍歩兵学校は、1912 年陸軍戸山学校から独立し、千葉・作草部に移り、射撃・戦術・通信術を教えていた学校である。陸軍騎兵学校は、1888 年に創設された陸軍乗馬学校が、1916 年習志野原に移り、1920 年に改名された学校で、騎兵に必要な馬術・射撃・通信術を教授した（騎兵の機械化進展により 1937 年には乗馬教育をやめたという）。陸軍野戦砲兵学校は、1886 年に陸軍射的学校として誕生し、1922 年に改名し、射撃・戦術・観測通信・馴法を教えていた。陸軍工兵学校は、1919 年に設立され、工兵技術、戦術、交通術を学ぶ学校だった<sup>(66)</sup>。

以下の一覧における出典については、表の左端欄に、出典①=日華学会編『留日中華学生名簿 昭和三年六月現在』1928 年 7 月 28 日発行、出典②=日華学会編『留日中華学生名簿 昭和五年六月現在』1930 年 8 月 1 日発行、出典③=日華学会編『留日中華学生名簿 昭和六年五月現在』1931 年 9 月 5 日発行、出典④=日華学会編『留日中華学生名簿 昭和七年六月現在』1932 年 9 月 1 日発行、出典⑤=駐日満洲国大使館編『満洲国留日学生録 康徳二年（1935）六月現在』1936 年 2 月 23 日発行、として略記する。

この一覧表に載せた情報は、基本的に原史料に従った。出身校、経費の出所など、解説や考察を加えるべきところが多々あるのだが、今回その作業はすべて省かざるを得ない。

ここでは、とにもかくにも、「千葉県域」で学び生活していた軍事系留学生の名前等を基礎資料としてまとめて示す事のみを課題とし、それゆえ、「付録」という扱いにしたことをご諒解いただきたく思う。

#### （1）陸軍歩兵学校（千葉県千葉郡都賀村；千葉市稻毛区作草部） 総計 41 名

1930 年 11 月 1 日から 1931 年 3 月 28 日まで（甲種学生） 出典③	蔡宗濂	吉林省	日本陸軍士官学校	公費	国民政府推薦
	張公達	雲南省	日本陸軍士官学校	公費	同
	吳 雄	廣東省	雲南講武堂	公費	同
	段唐華	湖南省	保定軍官学校	公費	同
	甘海瀾	四川省	日本陸軍士官学校	公費	同
	趙繼和	雲南省	雲南講武堂	公費	同
	楊文璉	安徽省	雲南講武堂	公費	同
	潘國屏	江蘇省	中央軍官学校・日本陸軍自動車学校	公費	同
	余萬里	廣東省	中央軍官学校・日本陸軍戸山学校	公費	同
	萬建蕃	江西省	同	公費	同
	鄭挺鋒	廣東省	中央軍官学校	公費	同
	熊綏春	江西省	日本陸軍戸山学校	公費	同

戦前期における千葉師範学校（現千葉大学教育学部）の留学生たち

	劉伯龍	貴州省	黃浦軍官学校・日本陸軍自動車学校	公費	同
	牟廷芳	貴州省	同	公費	同
	柏 嶽	湖南省	黄埔軍官学校	公費	同
	賴慧生	四川省	四川省講武堂	公費	同
	夏 聲	湖北省	江西講武堂	公費	馮玉祥推薦
	胡玉墀	山東省	西北軍教導團	公費	同
	張漢銀	四川省	四川省辦軍官伝習所	自費	劉文輝推薦
	宋人傑	四川省	日本陸軍士官学校	自費	揚 森推薦
1930年10月1日から1930年12月26日 出典③	胡明揚	江西省	保定軍官学校	公費	国民政府推薦
	劉立中	江蘇省	南洋陸師学堂普通科	公費	同
	張人権	廣東省	雲南講武堂	自費	同
	黃沛	四川省	金川江防軍軍官学校	自費	同
	陳 武	廣東省	中央軍官学校	官費	同
	林 英	廣東省	同	官費	同
	張修英	廣東省	西江陸海軍講武堂	自費	同
	陳 英	福建省	中央軍官学校	自費	同
	彭夢耕	湖南省	廣東陸軍軍官学校	自費	同
	李士珍	浙江省	黄埔軍官学校	公費	同
	王治熙	湖北省	中央軍官学校	自費	同
	譚禮勲	廣西省	同	官費	同
	林浚之	福建省	光華中学校	自費	同
	沈向奎	福建省	中央軍官学校	官費	張貞推薦
1936年8月入学、1937年8月卒業予定 出典⑤	張 楠	四川省	四川公学校	自費	田頌堯推薦
	楊興亞	四川省	四川陸軍講武堂	自費	揚森・鄧錫侯推薦
	吳聲鑄	湖南省	陸軍軍官学校	自費	何鍵推薦
	李驥騏	湖南省	廣東軍官学校	自費	張輝讚推薦
	李敵堅	四川省	四川省陸軍講武堂	官費	賴心輝推薦
	駱逸塵	湖北省	黄埔軍官学校	公費	国民政府推薦
	溥傑【満州國】	安東省長白	日本陸軍士官学校	軍費	

## (2) 陸軍騎兵学校（千葉県千葉郡二宮町：船橋市） 総計 10 名

1927 年 12 月 10 日 入学 出典①	張守經	奉天	甲種学生	官費	
	張慶第	奉天	同	官費	
1928 年 3 月 24 日 入学 出典①	鐘國樹	吉林	丙種学生	官費	
	于洪勛	黑龍江	同	官費	
	閔思海	吉林	同	官費	
	劉國治	奉天	同	官費	
	馬 貴	吉林	同	官費	
	張春霖	吉林	同	官費	
1930 年 9 月 1 日 入学 出典④	胡競先	江西省	乙種学生	官費	黄埔軍官学校卒業、陸軍中尉
1936 年 8 月入学、 1937 年 8 月卒業予 定 出典⑤	潤麒【滿 州國】	龍江省龍江	日本陸軍士 官学校	軍費	

## (3) 陸軍野戰砲兵学校（千葉県印旛郡千代田村：四街道市） 計 45 名

1930 年 6 月現在 在籍 出典②	吳 石	福建省	甲種学生	官費	保定軍官学校卒業
	劉佩韋	吉林省	同	官費	東三省講武堂卒業
	彭孟緝	湖北省	同	官費	黃浦軍官学校卒業
	劉宏遠	湖南省	同	官費	同
	胡 雄	浙江省	同	自費	黃岡講武堂卒業
	史宏熹	江西省	同	官費	黃浦軍官学校卒業
	席煥然	貴州省	同	自費	第四十三軍幹部学校卒業
	王保敬	河南省	同	官費	育德中学卒業
	周文章	遼寧省	乙種学生	官費	東三省軍士教導隊卒業
	趙 壁	遼寧省	同	官費	東三省講武堂卒業
	葉筱泉	遼寧省	同	官費	砲兵軍官教育班卒業
	趙維周	遼寧省	同	官費	東三省講武堂卒業
	吳滌凡	遼寧省	同	官費	砲兵教育班卒業
	張鳳書	遼寧省	同	官費	東北講武堂卒業
1931 年 5 月現在 在籍、6 月 27 日 終業予定 出典③	李春森	遼寧省	同	官費	同
	徐德庸	遼寧省	同	官費	同
	翟金墀	河北省	同	官費	西北陸軍幹部学校卒業
	張秀巖	河南省	同	官費	砲兵教導團卒業
	周軒昂	湖南省	馭法	自費	廣東陸軍軍官学校卒業
	黃國書	廣東省	甲種学生	官費	日本陸軍士官学校第 19 期砲 兵科
	嚴鈍摩	安徽省	同	官費	雲南講武堂、日本陸軍歩兵学

戦前期における千葉師範学校（現千葉大学教育学部）の留学生たち

				校甲種及乙種修了	
周文章	遼寧省	同	官費	東三省軍士教導隊卒業	
趙壁	同	同	官費	東三省講武堂卒業	
葉筱泉	同	同	官費	砲兵軍官教育班卒業	
趙維周	同	同	官費	東三省講武堂卒業	
吳滌凡	同	同	官費	砲兵教育班卒業	
張鳳書	同	同	官費	東北講武堂卒業	
李春森	同	同	官費	同	
徐德庸	同	同	官費	同	
黃崑崗	福建省	観測通信学生	官費	中央軍事政治学校砲兵科	
邵化民	遼寧省	同	自費	東北陸軍講武堂	
鄧鴻勲	廣東省	同	自費	中央軍官学校	
彭孟緝	湖北省	同	官費	黄埔軍官学校	
李雨鄰	遼寧省	同	官費	砲兵軍官教育班	
金定洲	同	同	官費	同	
孫樹名	同	同	官費	東北講武堂	
劉佩韋	吉林省	同	官費	東三省講武堂	
揚秉離	四川省	同・聽講	官費	陝西省陸軍講武堂卒業、日本陸軍士官学校第19期砲兵科卒業	
何紹周	貴州省	同・聽講	官費	黄埔軍官学校卒業、日本陸軍自動車学校甲種課程修了	
1932年7月現在 在籍 出典④	羅家岳	廣東省	甲種学生	自費	黄埔軍官学校
	許世欽	福建省	同	官費	同
	盧蔚展	湖北省	同	官費	中央軍官学校
	汪文輝	湖北省	同	官費	同
	彭佩茂	湖北省	同	官費	黄埔軍官学校
	姚學濂	廣東省	同	官費	同

## (4) 陸軍工兵学校（千葉県東葛飾郡明村；松戸市） 総計 10 名

1927 年 12 月 1 日入 学、1928 年 7 月退校 予定 出典①	杜維綱	奉天	甲種学生	官費	
	陳銳昌	京兆	同	官費	
	徐增善	奉天	同	官費	
1930 年 6 月現在在 学 出典②	廖行端	雲南省昆明県	将校学生	自費	雲南陸軍講武学校、同陸軍 高等軍事学校
	孫永強	浙江省游県	同	自費	援閩浙講武堂
	黃啓華	江蘇省江寧県	同	公費	陸軍軍官学校、国立暨南大 學、仏國留学約三年。
	方文滔	河南省鄭縣	同	官費	軍官教導團
	盧殿文	河北省霸縣	同	官費	陸軍雷電学校
	張學銘	遼寧省海城県	同	官費	奉天省立第三中学校
	榮子恒	河北県棗強県	同	官費	陸軍工兵教育班、日本陸軍 士官学校

<sup>1</sup> 見城「明治～昭和期の千葉医学専門学校・千葉医科大学における留学生の動向」『国際教育』第 2 号、2009 年。同「戦前期 留日医薬学生の帰国後の活動と現代中国における評価－千葉医学専門学校・千葉医科大学中国留学生の事例」『国際教育』第 3 号、2010 年。同「千葉医学専門学校・千葉医科大学時代の留学生をめぐる諸史料について」『国際教育』第 7 号、2014 年。

<sup>2</sup> 見城「戦前期における千葉高等園芸学校の留学生とその動向」『国際教育』第 4 号、2011 年。

<sup>3</sup> 見城「戦前期における東京高等工芸学校（現千葉大学工学部）の留学生とその動向」『国際教育』第 6 号、2013 年。

<sup>4</sup> 日華学会は 1918 年に小松原英太郎を会長とし、渋沢栄一等の財界人を顧問として設立された団体で、中国留学生に対する寄宿舎提供、経済援助、日本語予備校の経営などを行っていた（砂田實編『日華学会二十年史』、1939 年、参照）。なお、見城は、日華学会機関誌の『日華学報』（1928～1945 年）の復刻版を 2013 年に出す際、大里浩秋氏、孫安石氏と共同作業を行い「監修者」となっている。さらに、解説論文として、「『日華学報』にみる留日中国学生の生活と日本認識」を復刻版の第 16 卷（ゆまに書房）に収めている。

<sup>5</sup> 千葉大学教育学部同窓会発行。ここでは、2006 年度版を参照した。

<sup>6</sup> 『満洲国留日学生録』は、日本国内の一部図書館が保有している。その第一冊目は、「康徳 2 年（1935）6 月現在」の名簿であり、「康徳 10 年度（1943）」分までが確認されている。しかし、残念ながら「康徳 9 年度（1942）」の存在は不明らしく、CiNii Books のリストにも掲載がない。また、2012 年に龍溪書舎が、この学生録を復刻しているが、1942 年分はやはり欠落している。

<sup>7</sup> 百年史編集委員会編『百年史 千葉大学教育学部』第一法規出版、1981 年。

<sup>8</sup> 劉振生『「満州国」日本留学史研究』吉林大学出版社、2004 年、劉「「満洲国」日本留学生の派遣」（大里浩秋・孫安石編著『留学生派遣から見た近代日中関係史』御茶の水書房、2009 年）、劉『近代東北人留学日本史』民族出版社、2015 年、周一川『中国女性の日本留学史研究』国書刊行会、2000 年、浜口裕子『満洲国留学生の日中関係史－満洲事変・日中戦争から戦後民間外交へ』、勁草書房、2015 年、河路由佳・淵野雄二郎・野本京子『戦時体制下の農業教育と中国人留学生』農林統計協会、2003 年、王嵐『戦前日本の高等商業学校における中国人留学生に関する研究』、学文社、2004 年など。

<sup>9</sup> あとで見るように、千葉師範学校に初めて留学生が入るのは、1937 年である。したがって、本稿のタイトルの「戦前期」で括るのは必ずしも適切でない、という考え方もある。しかし、註記の 1 から 3 で示した筆者による研究が、「戦中期」の学生も取り扱いながら、すべて「戦前期」という括りにしてきたことに合わせ、本稿でも引き続き、タイトルには「戦前期」を用いた事をお断りしておく。なお、1945 年 8 月 15 日以降を「戦後」、それ以前を「戦前」とみなす通俗的見解に従ったという説明でも良いかもしれない。

- <sup>10</sup> 前掲『百年史 千葉大学教育学部』 p 251。1872年からの略史も同書による。
- <sup>11</sup> 『満洲国留日学生録』の各年版を参照。
- <sup>12</sup> 東京文理大学・東京高等師範学校 紀元二千六百年記念会編著『現代支那満洲教育資料』(培風館、1940年)、p 426～429。
- <sup>13</sup> 住川清「体験記 東亜建設青年訓練所について」『成田市史研究』30号、2006年3月。
- <sup>14</sup> 灘波理一郎「東亜育英会と満洲国留学生」(謝廷秀編『満洲国学生日本留学拾年史』1942年) p 86～89。
- <sup>15</sup> 阿部洋『『対支文化事業』の研究』、汲古書院、2004年。阿部「『対支文化事業』と満州国留学生」大里浩秋・孫安石編『中国人日本留学史研究の現段階』御茶の水書房、2002年。
- <sup>16</sup> 留学生たちの見学旅行については、見城「一九二〇～三〇年代における中国留学生の日本旅行記」『人文研究（千葉大学）』40号、2011年、見城「一九三〇年代における中国留学生たちの日本見学旅行」(矢嶋道文編『互恵（レシプロシティー）と国際交流』クロスカルチャー出版、2014年、を参照のこと。
- <sup>17</sup> 見城「近代千葉における中国留学生と海水浴体験」『千葉史学』60号、2012年、p 151。
- <sup>18</sup> 「第二章 学生会の沿革」(謝廷秀編『満洲国学生日本留学拾年史』1942年) p 165～167。
- <sup>19</sup> 1927年に農村中堅人物の養成を目的に創設。初代校長は、農本主義者として知られた加藤完治で、「満洲開拓移民」の育成を積極的に担っていた。(野本京子『戦前期ペザンティズムの系譜—農本主義の再検討』日本経済評論社、1999年、p 166)
- <sup>20</sup> 同上。 p 181～192。
- <sup>21</sup> 田中剛「「蒙疆政権」留学生の戦後」(大里浩秋・孫安石編『近現代中国人日本留学生の諸相』御茶ノ水書房、2015年) p 178。
- <sup>22</sup> 見城「太平洋戦争下における留日中国学生の夏季鍊成団」『人文研究（千葉大学）』42号、2013年。
- <sup>23</sup> 廖繼思『いつも一年生』、財団法人台北市台中一中校友会文教基金会、2010年(見城「千葉医学専門学校・千葉医科大学時代の留学生をめぐる諸史料について」『国際教育』7号、2014年、p 112～113)。
- <sup>24</sup> 柳歩青「医者修業とはかないロマンス」『あのころの日本—若き日の日本留学を語る』日本僑報社、2003年(見城「戦前期 留日医薬学生の帰国後の活動と現代中国における評価」『国際教育』3号、p 87)。
- <sup>25</sup> 前掲、『百年史 千葉大学教育学部』、p 396～397。
- <sup>26</sup> 周軍「満州国留学生と広島高等師範学校」『広島東洋史学報』9号、2004年。
- <sup>27</sup> 前掲、周「満州国留学生と広島高等師範学校」p78～79。なお、前半の引用は、王「五月記事」『満州国留学生会会報』第8巻第8号、1943年、後者は、王「雨傘」『同上』第7巻第7号、1942年。
- <sup>28</sup> 「留学生須知」『満洲国留日学生録 昭和13年、康徳5年度』1938年、p 227。
- <sup>29</sup> 「認可試験」は、筆記試験、口頭試問、身体検査からなるが、筆記は「国民道徳」、「国語（日語及満語又ハ日語及蒙古語ノ解釈作文）」、「数学（代数及幾何）」の3科目であった（「留学生規程」『満洲国留日学生録 昭和13年、康徳5年度』1938年、p 216～218）。また、周一川「『満洲国』の留学政策と留学生」(前掲、周『中国女性の日本留学史研究』p 266～268)、を参照。
- <sup>30</sup> 趙洪鳳「「満洲国」派遣留学生の派遣地と学習学科に関する考察」『教育基礎学研究』4号、2006年。
- <sup>31</sup> 前掲、周軍「満州国留学生と広島高等師範学校」、p 74。なお、この表は、「満洲国」教育史研究会『「満洲・満洲国」教育資料集成 第13巻 留日学生』1992年、の所収史料(なお、この史料自体は、註14の謝廷秀編『満洲国学生日本留学拾年史』1942年の復刻版である)から周氏が作成したものである。一方、筆者が、『満洲国留日学生録』を参照して作成した表2と、性格は異なるとは言え、絶対数がだいぶ違っている点には留意した方がよいだろう。なお、全留学生中の「師範系」学生の百分率は、周氏の表は「9.8%」となっており、表2の傾向と近いところがある点も付け加えておきたい。
- <sup>32</sup> 前掲『現代支那満洲教育資料』、p 397～398。
- <sup>33</sup> 前掲『現代支那満洲教育資料』、p 420。
- <sup>34</sup> この教育方針を、日本による「奴隸化教育」と批判する観点は、現代中国で共通する。王智新編著『日本の植民地教育・中国からの視点—中国学者看日本侵華奴化教育史』社会評論社、2000年、など。
- <sup>35</sup> 鈴木健一「満州国の国民教育と教員養成問題」『歴史における民衆と文化』国書刊行会、1982年、塚瀬進『満洲国—「民族協和」の実像』吉川弘文館、1998年、p 76。
- <sup>36</sup> 前掲、塚瀬進、p 77。
- <sup>37</sup> 前掲、劉振生「「満洲国」日本留学生の派遣」、p 157。
- <sup>38</sup> 前掲『現代支那満洲教育資料』、p 398。
- <sup>39</sup> 趙洪鳳「昭和初期「満洲国文教部派遣留学生」に関する考察」『九州教育学会研究紀要』33巻。2005。
- <sup>40</sup> 「第一回文教部派遣留学生 昭和九年五月」外務省外交史料館所蔵史料（国立公文書館アジア歴史資料センター Ref. B05015567600）。
- <sup>41</sup> 「第二回文教部派遣留学生 昭和十年三月」外務省外交史料館所蔵史料（国立公文書館アジア歴史資料センター Ref. B05015567700）。
- <sup>42</sup> 「第三回文教部派遣教員留学生 昭和九年十二月」外務省外交史料館所蔵史料（国立公文書館アジア歴

- 
- 史資料センター Ref. B05015567800)。
- <sup>43</sup> 「第四回文教部派遣教員留学生 昭和十年五月」外務省外交史料館所蔵史料（国立公文書館アジア歴史資料センター Ref. B05015567900）。
- <sup>44</sup> 「第五回文教部派遣教員留学生 昭和十一年二月」外務省外交史料館所蔵史料（国立公文書館アジア歴史資料センター Ref. B05015568000）。
- <sup>45</sup> 前掲、見城「戦前期における東京高等工芸学校（現千葉大学工学部）の留学生とその動向」、p 34。
- <sup>46</sup> 楊曉・田正平「清末留日学生教育の先駆者 嘉納治五郎」（大里浩秋・孫安石編『中国人日本留学史研究の現段階』御茶の水書房、2002年）。鈴木博雄『東京教育大学百年史』1978年。
- <sup>47</sup> 前掲、灘波「東亜育英会と満洲国留学生」、p 84～87。
- <sup>48</sup> 前掲、灘波「東亜育英会と満洲国留学生」、p 83。
- <sup>49</sup> 前掲、浜口『満洲国留日学生の日中関係史』、p 77。
- <sup>50</sup> 見城「日中戦争下における中国人留学生の生活と留日意識」（『北東アジアにおける『記憶』と歴史認識に関する総合的研究』平成18～21年度 科研 基盤研究（A）18202014 研究代表者 千葉大学 三宅明正 2010年）。
- <sup>51</sup> 「姚頌恩自伝」（王奇生『留学与救国—抗戦時期海外学人群像』広西師範大学出版社、1995年、p 279）。
- <sup>52</sup> 陳辛仁「池袋のアパートで誕生した革命雑誌」（前掲『あのころの日本』p 168。陳（1915生）は、1934年に来日し、36年に帰国した）。
- <sup>53</sup> 孫平化『中国と日本に橋を架けた男』日本経済新聞社、1998年、p 31～40。
- <sup>54</sup> ここから、満州国留学生の「帰国」までの経緯は、すべて田中剛「日本敗戦前後の中国人留日学生政策—汪精衛政権・「満洲国」・「蒙疆政権」—」（森時彦編『長江流域社会の歴史景観：京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター研究報告』2013年）を参考にした。
- <sup>55</sup> 敦賀に舞い戻った経緯などについては、前掲、田中「「蒙疆政権」留学生の戦後」を参照。田中は、日本に残された留学生たちのその後についても叙述しているので、興味ある方は参考にされたい。
- <sup>56</sup> 『満洲国留日学生録 昭和16年、康徳8年度』1941年、p 83。
- <sup>57</sup> 『満洲国留日学生録 昭和18年、康徳10年度』1943年、p 12～15。
- <sup>58</sup> 前掲、浜口『満洲国留日学生の日中関係史』、p 79～86。
- <sup>59</sup> 1937～38年に東京高等農林学校（現東京農工大学）に入学した元満州国留学生3名に対する聞き取りが、註8にあげた『戦時体制下の農業教育と中国人留学生』に収められている。しかし、紙幅の関係で、紹介することは割愛せざるを得ない。興味ある方はぜひ参照されたい。
- <sup>60</sup> 千葉市HP「千葉市ゆかりの家・いなげ」  
<http://www.city.chiba.jp/kyoiku/shogaigakushu/bunkazai/yukarinoiage.html> (2016年1月18日閲覧)。
- <sup>61</sup> 上の引用とも、愛親覚羅浩『流転の王妃の昭和史』新潮文庫、1992年、p 45～46（初出は1984年）。
- <sup>62</sup> 註1 見城「千葉医学専門学校・千葉医科大学時代の留学生をめぐる諸史料について」に、千葉医科大学時代の留学生名簿を示しているので、参照されたい。
- <sup>63</sup> 日華学会編『留日中華学生名簿』各年版を参照。
- <sup>64</sup> 『満洲国留日学生録 昭和12年、康徳4年度』p 177。
- <sup>65</sup> ここの数字も『満洲国留日学生録 昭和12年』版を参考に示している。なお、留学生名簿の数字がしばしば異なっている事実について先に触れたが、『中華民国満洲国 留日学生名簿 昭和十二年六月現在』のデータでは、東京の陸軍大学校に10名（中華1、満州9）、陸軍士官学校に98名（中華77、満洲21）、陸軍經理学校2名（満州2）が在籍したことになっている。この「混乱」はきわめて悩ましい問題である。
- <sup>66</sup> 来歴については、吉川弘文館編集部編『近代史必携』吉川弘文館、2007年、p 334。教授内容については、百瀬孝『事典 昭和戦前期の日本』吉川弘文館、1990年、p 342～344、をそれぞれ参照した。